北国から来た青年

――ひとまずの送別の辞　小林正幸君へ――

平山令二

半世紀ほど前の一九七四年四月のことだった。本郷の独文科研究室で、大学院修士課程の入学者の集まりが行われた。教授、助教授、助手の前に、九名の入学者が集められた。顔見知りの独文科同級生もいたが、初めて見る顔も多かった。なにしろ、一九六八年に頂点を迎えた学生運動の残り火の勢いがまだ盛んな頃で、学内も内ゲバなどで騒然としていて、学生同士の交流にも障害があり、留年する学生も多かった。ひと言でいえば、学生は孤立し、なにかと落ち着かない時代だった。

その場で自己紹介を順番に行った。なかでひとり白皙の好男子は寡黙で、いかにも文学青年の香りを漂わせていた。その青年、小林正幸君と話すようになったのは、少し経ってからだったと思う。小樽出身で、大学は弘前大学と聞いて、それだけで畏敬の念を持った。小樽といえば、小林多喜二、伊藤整に代表される文学の町であり、ロマン

チックな運河と洋館の町、そこにまた、弘前は太宰治の学んだ城下町である。ふたつの著名な文学の町で暮らした小林君には羨ましさを覚えた。その後、伊藤整の詩集『雪明りの路』の清新さなどの話をした覚えがある。

もっとも、地方出身の小林君も私もバイトなどで忙しく、ゆっくり話す機会はそうなかった。大学院時代の小林君の言葉で印象に残っているものがある。ある日、上野不忍池のほとりをふたりで歩いていたとき、なにかの拍子に小林君が「日本人は特定の宗教を信じてもいないのに、結婚式を神道やキリスト教の方式で行うのは節操がない。神を本当に信じていないなら無宗教でやるべきだ」と強い口調で言った。私はそれまで結婚式の方式など考えたことがなかったので、なぜそのように強い口調で言うのか驚いたが、なるほど信じてもいない神様の前で結婚式を行うのは日本人のいい加減さかな、と思った。

それから数年して私は結婚することになり、結婚式の方式を考えざるを得なくなった。本来、結婚式などしなくてもよいと考えていたが、双方の両親のことを考えると、なんらかの形式を踏まなければならないだろうと思うようになった。そのときに不忍池で聞いた小林君の強い口調を思い出し、特定の宗教形式ではなく、ふたりで相談して無宗教の人前結婚式という形にすることにした。双方の両親の了解も得て人前結婚式を無事行うことができた。ただ特定の形式がないので、式の進行やふたりで読む誓いの言葉を考えるなど面倒くささもあり、式の後で兄などは神道などの形式の方がよかったのでは、と感想を述べていた。

さて、私が山形大学、小林君は富山大学に就職が決まってから、しばらくして会ったときに、小林君も結婚していたので「結婚式は無宗教でやったの」と何気なく聞いた。すると彼の答えは「神道でやった」というものだった。その後、照れ臭そうに「家族に無宗教の式を反対されたので」と付け加えた。私はいささか唖然としたが、親に反対さ

れれば仕方ないだろうとも思った。ただ、あのときの強い口調が耳に残ってはいたが。

私が山形大学から中央大学に移ってから、金沢で学会が開催された際に富山に立ち寄り、小林君に案内してもらった。日本海に面し、立山の威容がすぐ近くに見える富山は住みやすそうに思えた。彼の姿で驚いたのは、私もそうだったが、大学院時代はろくなものも食べていなかったせいで痩せていたのだが、富山での姿は体重が倍あるのではと思えるほど太っていて、顔も丸顔になっていた。思わず「太ったね」と言うと、富山は海の幸が美味しく酒もうまいので食べ過ぎた、とのことだった。また夏が暑かったので、ビールをひと晩で一ダースほど飲んでしまった、と言うのである。北国出身の小林君は酒が強かった。それにしてもひと晩にビール一ダースとは飲み過ぎではないか、と思った。水ならそんなに飲むことはできないだろう。なお注釈を入れたいが、この話をその後持ち出すと、小林君は「そんなこと言ってないよ。一ダースも飲んでいない」と打ち消すようになった。彼の一番身近な情報源に電話で確認したところ、「ひと晩に一ダース以上飲んでいたこともあります」との確証を得たので、書いておきたい。

さて、「富山の居心地はどう」と聞くと、意外なことに返事はネガティブなものだった。彼の言うには、富山の人は商売に長けているが、芸術などには興味がない。昼間街中を歩いても人の姿がない、夫婦で働いているからだ。富山の人の名誉のために言うが、その後私は何回も富山を訪れたが、富山の風土、風の盆などの伝統行事、富山湾の海の幸、工芸などに深く感銘を受けた。富山の人々も、売薬さんやＹＫＫなどの世界的企業で知られる勤勉な人々だが、個性的な人も多かった。しかし、小林君は故郷の北海道か東京の大学に移りたいという意向だった。

その後ちょうど法学部で人事案件があり、小林君をよく知る北さんにも賛成していただいたので、同僚として迎えることができた。法学部には、船山先生、相馬先生、入野田先生など暖かい人柄の先生方が多くいらして、小林君は

ドイツ語部会にすぐに溶け込むことができたと思う。研究の分野でも、本来はシラーを研究していたのだが、人文研で入野田先生が主宰されたオーストリア研究チーム、さらにその後のユダヤ研究チームに参加して、彼の研究もオーストリアやユダヤ研究にシフトすることになった。その意味では、小林君にとって中大法学部に移ったことは得るものが多かったのではと想像する。

同僚としての三六年間の思い出は多くて書き切れないが、ふたつだけ書いてみたい。

ひとつ目は、いっしょに劇を上演したことである。一九八六年、世はバブルの時代だったが、バブル批判の意も込めて「大英博物館の対話——漱石と熊楠」という劇を新宿の今はない「モーツァルトサロン」で上演した。漱石は相馬先生にお願いし、熊楠は非常勤の鹿児嶋さんにお願いした。その他、学生にも登場してもらった。朗読劇の形式だったが、それだけでは面白くないし、劇場側も音楽があることが貸し出しの条件だったので、音楽を入れた。冒頭に小林君に登場してもらい、イギリス国歌「God save the Queen」を歌ってもらった。彼の歌声を聞くのは初めてだったが、弘前大学で合唱部の指揮をしていただけあり、透き通るような美声で場内の雰囲気が大いに盛り上がった。

もうひとつは、最近のことである。小林君は学生支援委員会の委員長を四年間勤めた。法学部独自の奨学金「やる気応援奨学金」の立ち上げのときから関与していた関係で、委員長を引き受けたのだった。委員長のような表立った仕事をすることは好きではなかったと思うが、責任感が強いので、委員会の運営や教授会での報告など、綿密に考えて実に見事に行った。子どもの頃は銀行員志望だったというだけあり予算作成などにも詳しく、また几帳面な性格から手続きを慎重に進め遺漏がなかった。彼の秘められた実務能力を知る思いだった。

実は小林君の後、私が学生支援委員会の委員長を引き継ぐことになった。予算など計算の苦手な私には不向きな仕事だったが、当初予定されていた方が都合でできなくなったとのことで、急遽引き受けざるを得なくなった。その際、私は前任者の小林君に予算関係はすべてお任せするからよろしく、と虫のいいことをお願いした。それから四年間、小林君は予算関係を担当してくれ、奨学金の毎年の予算や原資の将来予測なども立ててくれて、なんとか無事任期を終えることができた。このことに深く感謝している。

小林君の退職後は、弘前大学でピアノを学ばれたご伴侶とコンサートに出かけたり、ホームコンサートを開いたり、美しい音楽に囲まれた日々を過ごし、ときには研究滞在したウィーンなどにも出かけるのではないか、と想像する。人文研の研究会などでこれからも顔を合わせることができるのは楽しみである。最後に、これまでとこれからの厚誼に感謝して、ひとまず送る言葉にしたいと思う。